

執筆担当・奥山正樹

はじめに

「蒼天そうてんに展ひらく」は一九三二（昭和七）年八月八日に出版された「国立公園候補地航空写真集」である。発行者は大阪毎日新聞社と東京日日新聞社。七九点のグラビア写真を掲載したB5判の紐綴冊子で、定価は五〇銭注だった。現在



は国立国会図書館デジタルコレクションでも閲覧できるが、原本の画質を堪能することは難しい。江戸川大学国立公園研究所では、二〇二四年に本書を入手し蔵書に加えたので、この機会に改めて本書の背景と意義を振り返ってみたい。

「候補地写真集」としての背景

本書を発行した大阪毎日新聞社と東京日日新聞社は、日本での国立公園の創設に際し、国民の機運醸成に大きな役割を果たした。

一九二七年に選定された「日本新八景」（八景、二五勝、百選）は両社が主催し、九、三〇〇万票を超える応募を得て実施され、錚々たる文士による紀行文集の出版を経て国立公園設立への運動を加速したことが知られている。

一九三〇年には朝日新聞社が、国立公園候補地の写真を懸賞公募

し、六四七点の応募を受けて三〇四名を紙面で表彰していた。

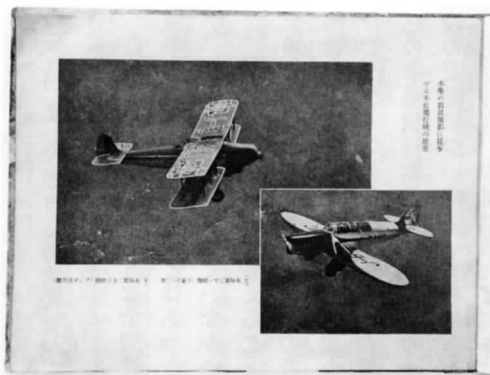
一九二七年に発足した国立公園協会は、一九二九年八月に東京三越で国立公園展覧会を、一九三〇年七月には東京銀座伊東屋で国立公園写真展覧会を開催している。また、本書の発行と同じ一九三二年には著名な洋画家たちが候補地を描いた二六作品による「国立公園洋画展覧会」が三越東京本店等で開催され、国立公園絵画として今日まで継承されている。

本書の巻末には、内務省による一七地域の国立公園候補地調査や選定特別委員会等に関する附録記事が掲載され、「内務省の指定腹案」として、三、五、八大国立公園に加え三候補地を挙げた上で、日光、富士（附設箱根）、日本アルプス、十和田湖、瀬戸内海、阿蘇、霧島、阿寒湖、雲仙、大臺ヶ原及大峰の一〇候補地（前記八大国立公園と三候補地から大雪山を除く）について特質と区域を解説している。同年九月から一〇月にかけて最終決定された一二カ所に至る選定経緯の報道記録としても貴重な文献の一つだと言える。

当時の技術的背景

航空機

本書の写真撮影に使用された航空機二機は巻頭に写真付きで紹介されている。大毎第二一七号機「三菱T一二型」は、帝国海軍の艦上攻撃機を改造して量産された複葉機、大毎二三三三号機「ブレダ三三三型」はイタリア製の低翼単葉機である。いずれも操縦士に加え後部に撮影者が搭乗できる複座式であり、当時の最新鋭機だったと推察される。旅客機が日本で就航したのは戦後一九五一年であり、遡ること約二〇年前の当時、一般国民にとつ



て航空機からの視点は、まさに雲上のものだったに違いない。

なお、測量を伴い鉛直方向に撮影するいわゆる「空中写真」は、日本では一九二三年の関東大震災直後に帝国陸軍（陸地測量部）が撮影したのが最初で、使用機体はフランス製の偵察機（複葉複座）で外国製の乾板カメラでの手持撮影だったとされている。

写真機

本書の掲載写真の撮影に用いられた写真機の詳細は記されていない。当時はシートフィルムからロールフィルムへの過渡期であり、どちらが使用されたかも不明である。

日本では一九三〇年にシートフィルムを使用したレンズシャッターカメラ「トウゴロカメラ」が発売され、一九三二年には日本光学のニッコールレンズが誕生、一九三六年に国産三五ミリカメラ「ハンザキヤノン」が発売されている。

当時、一般庶民にとってカメラはまだ手が届かない高級品だったが、写真愛好家の層は広がりを見せており、「カメラ」（一九二二）「フォトタイムス」（一九二四）「アサヒカメラ」（一九二六）が相次

いで創刊している。風景写真の分野では武田久吉の「尾瀬と鬼怒沼」（一九三〇）「富士山」（一九三二）、岡田紅陽「富士百景作品集」（一九三二）が刊行されている。

国立公園誌においては、創刊号（一九二九年三月）口絵や第一巻八号（同年一〇月）に飛行機から撮影された上高地、焼岳、穂高連峰の写真が掲載されている。また、第二巻第七号（一九三〇年七月）は「国立公園写真号」と銘打たれ、田村剛が巻頭言で写真術がいかに国立公園事業と密接なものかを述べている。

印刷技術

本書はグラビア印刷で作製され、印刷所は大阪毎日新聞社だった。グラビア印刷とは凹版印刷の一種で、微細な濃淡が表現でき写真印刷に適していることから、欧米の雑誌をはじめ当時の印刷文化に革命を巻き起こしたとされる。

日本でグラビア印刷が初めて一般の目に触れたのは、一九二一年正月の朝日新聞（付録の朝日グラフィック）で、国産の輪転印刷機により初めて刷り上げられた歴史

なお、現在日本で一般に言われる「グラビアページ」は、ほぼすべて平版を用いたカラーのオフセット印刷に代わっているが、芸術写真といえばグラビア印刷だった当時の名残だけが単語として庶民に定着して今日に至っている。

写真集に展かれた風景

本書に掲載された七九点の多くは一九三二年三月ごろから七月にかけて撮影されたもので、北海道（阿寒湖）の一枚だけは「未だ航空写真なきため」地上撮影のものを加えたと注記されている。

本書が国民に披露した国立公園



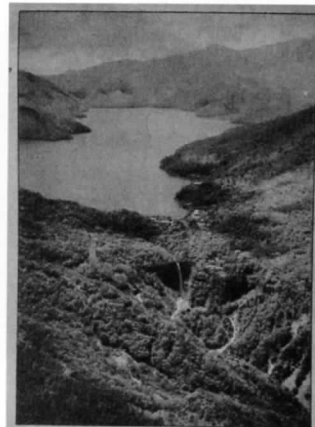
©2024 Google Earth

「湯本の富士」箱根湯本村の上空から北西に向かい遠く富士を望む



©2024 Google Earth

「屋島」東南から北西を望む



©2024 Google Earth

「中禅寺湖」手前に華厳の滝

候補地の航空写真は、当時白熱した議論を展開し候補地を絞り込んでいた専門家にとっても馴染みの少ない斬新なものだったと想像さ



©2024 Google Earth

「錦江湾」
鹿児島市荒田町
上空から北東に
桜島を望む



©2024 Google Earth

「鞆の浦」
中央が狐崎、
右上は仙酔島

本書が刊行されて九〇年が過ぎ、現代の私たちは、衛星画像やドローンなど様々な手法を使って国立公園の空からの風景を当たり前の

おわりに

れる。我が国には斯くも壮大で美しい自然風景が展かれていて、間もなく欧米に匹敵する国立公園が誕生するのだという機運を盛り上げるにふさわしい写真集だったに違いない。



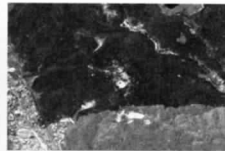
©2024 Google Earth

「温泉岳(普賢岳)」
雲仙公園側南西から
望む

注一 当時の大卒会社員の初任給は約七〇円、企業物価指数は現在の約一千分の一

本書では、掲載写真七九点から八点を厳選し、近影と比較するため、パソコン上で簡単に得られるグーグルアースの衛星画像を対照させて並べておく。

ように楽しむことができる。だからこそ、国立公園の黎明期に当時の技術の粋を集め「天空の視点場」から撮影された写真群を、貴重な遺産として改めて共有したいと考えた。

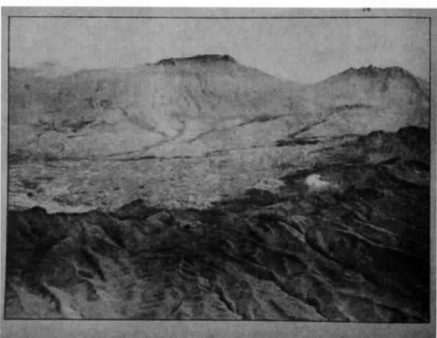


©2024 Google Earth

「吉野山」
吉野神宮方面に向け
南西に見た山景

奥山 正樹 ● おくやま まさき
一九九〇年環境庁(当時)入庁。生物多様性センター長、信越自然環境事務所長などを歴任。鹿児島大学を経て二〇二四年四月から江戸川大学教授、国立公園研究所長。博士(農学)、技術士(総合技術監理・環境部門)。

注二 朝日と毎日とは二大新聞として発行部数も拮抗し、いずれも東京と大阪で二紙を発行していた。朝日新聞社は一九二三年に陸軍から払い下げられた複葉機により東京大阪間の定期航空輸送を運用した経験も有していた。



©2024 Google Earth

「南郷谷の阿蘇」
阿蘇の噴火を
高森町方面から
望んだ大観